目安箱165

たかがトラ二頭の話

上野昂志

たかがトラ二頭の話である。これが原爆でも抱えこんで逃げまわっているというなら話もべつだが、彼らは着のみ着のまま、いや、生れたときの姿のまま逃げているというだけのことである。だが世間は、たかがトラ二頭とは、決して思わないらしい。

八月四日の読売新聞の「闇夜のトラ息ひそめ厳戒」という、まるでトラが厳戒しているような感じの見出しがついた記事には、こんな文章が書かれている。「夜に入り、警察、消防団員など百五十人が降り出した小雨の中で徹夜警戒に当たったが、深い闇の中で不気味に静まりかえった神野寺周辺は、張りつめた恐怖の一夜を過ごした。」（傍点引用者）

だいたい神野寺のあたりなどはいつもでも夜は静まりかえっていると思うが、今夜は特別だ。もう、不気味に静まりかえっちゃっているのである。そして、誰もが、張りつめた恐怖の一夜を過ごしているのである。凄いねえ。あれから一週間はたっているから、この「張りつめた恐怖の一夜」は、もう、恐怖の六夜になっている勘定だ。ますます凄い。でも、そのあいだ、ずーっと張りつめているというのは、相当に大変なことだと思う。

だが、むろん、不気味に静まりかえった神野寺周辺で、張りつめた恐怖の一夜を過しているのは、新聞記者にすぎない。彼は、もしこの国でゲリラ戦でも起こって、ゲリラがミサイルでも持って闇にひそんでいたりしたらどうなるのだろう。張りつめすぎてパンクしてしまうのではないだろうか。

再びいう、これは、たかがトラ二頭の話なのだ。専門家にいわせればツメは五、六センチあるはずだから追いつめられて、逆にとびかかってきたときには、ほおをむしられるぐらいのケガはするということだが、つまりはその程度だ。ところが世間は、トラ＝猛獣＝人殺し＝恐怖＝張りつめる、と、まったくなんの疑問もなしにエスカレートするだけなのだ。あきれた人間の論理である。いや、人間の論理にしても、これはあまりにも衰弱している。

井上ひさしとかいう小説家の、好子さんとかいう夫人が例によって新聞に意見を寄せているが、この人によれば、トラは人工の環境に順応できないから、時間がたつにつれて、「人間に対して攻撃的な精神状態になり、人を襲うようになることは明らか」なのだそうだ。わたしは井上好子という人を知らないが、彼女はトラの精神分析ができるらしい。まったくたいしたものだ。わたしには知識がなく、トラの精神など少しもわからないから、少しは知っている人間社会のほうに限っていうが、新聞に意見を寄せるのはかまわぬが、

たまには、新聞社の熱をさますような意見をいってみてはどうだろう。つまり、あんたたちは大騒ぎするのが商売だろうが、たかがトラ二頭の話じゃないかとでも。もっとも、井上好子さんは、これまた例によって「老人や幼児が襲われてからでは手遅れなのです」と、何故か「老人と幼児」だけを選んで「襲われる」ことの危険を強調しているから、これは本気で自分の意見を信じているのかとも思われる。ならば、彼女に新聞社の熱をさますような意見を期待するほうが間違いというものだろう。彼女はファシストなのだから。

こういう人にくらべれば、事件が起こるとすぐさま、ホクホクした面持ちで駆けつけた猟友会の連中のほうが、まだしもわかる。彼らは、単純におもしろがっているのだ。わたしの見たテレビのニュースでは、このなかの一人が、「生きているトラを撃てるなんて、こんなチャンスはめったにありませんからね」と語っていたが、それこそ彼らの本音だろう。大藪春彦さんのように、アフリカに猛獣狩りに行く機会もないとしたら、これこそ天の配剤、生きた猛獣を撃ち殺す絶好の機会というわけである しかも、これはお上から許された、官許の狩猟だからなおさらだ。だから、わたしにわからないのは彼らが、一頭のトラを射殺したあとそれを住職に批判されると、すぐさま、みんなが困っているから来てあげたのに、それをそんなふうにいわれてはとか何とか、タテマエを口にしてすねて見せたことだ。何故、おもしろいから射ち殺したと、本音をいって開きなおらないのであろうか。それとも、彼らは、所詮、タテマエがなければ、たかが猟銃一発うてないのであろうか。

そしてさらに奇怪なことは、張りつめた恐怖の一夜を過ごしていたはずの新聞が、トラが射殺されたその日だけは、にわかに、トラ君、かわいそう!に、調子を変えたことだ。まったくいい気なものだぜ。トラがかわいそうなのは、そもそもの初めからのことで、殺されたときに始まったものではない。ところが、この世間は、死ねばにわかにかわいそうと、そうなるのだ。このセンチメンタリズムは、たかが二頭のトラが野に放たれた瞬間に「恐怖」に張りつめ、「不気味」に感じるその過剰防衛の反応と、同じ根から出ているのだ。どちらも、具体物としてのトラに対して、一方ではこれを徹底して抽象的な「恐怖」として扱い、一方ではこれを即時的な感傷として流し去るのである。そのどこにも、トラそのものは不在なのである。

井上好子の「老人や幼児」にしてもまったく同じである。いったい何故、老人と幼児であってふつうの成人ではないのか。それは、ここで彼女が、いささかも、老人や幼児をその具体性においてとらえていないということの証明でしかないのだ。彼女はただ、「弱者」という抽象において、公共の安全が守らねばならないことを主張しているのだ。その抽象性こそ、猟友会の、タテマエのもとに押し隠された本音と野合してファシズムを作り出すものにほかならないのである。わたしは、彼女が、たとえば人質をとって逃げまわる強盗は、即座に殺すべきであると、いまとまったく同じ主張を常日頃くり返していないのはおかしいと思う。また、バスをチャーターして乗りつけてきた猟友会の連中が、たとえば大阪の三菱銀行にまで出かけていかないのはおかしいと思う。いっていることもやっていることも、寸分違ってはいないのに。

トラはネコ科の動物だが、このトラ騒ぎが起こる二、三日前には、そのネコが問題になっていた。野良ネコが横行して困るというのだ。以前も同じようなことがいわれて、同じように論じたことがあったが、今度は、やはり世間のほうがエスカレートしていて、飼いネコは家から外に出すべきではないというような意見まで出ているらしいのだ。まったくあきれた話だ。野良ネコの被害といわれているものが、実際にどの程度あるかわからないが、昔は、魚を取って逃げるネコがいれば、石をぶつけたり、棒切れで叩いたり、要するに自分で始末していたのである。ところがいまは、それも条例なり法律なりで取締まってくれというのだから、恐れ入る。狭い土地を、方寸で切りわけてミニ開発などを称しては売ったり買ったりすることしか能のないこの国の住民は、いまや、ネコがそこらを歩きまわることにも耐え得ないほどに衰弱してしまったのである。それほど衰弱した人間が、この地上を、なお我物顔をして占有する必要がはたしてあるのか。わたしは、ネコに意見をきいてみたい。そしてトラにいいたい、断固として逃げまくれ、と。このいやらしい列島に、なお野生のトラがいるとしたらこんなに楽しいことはない。